

夏どりイチゴの産地育成

夏どりイチゴとは、一年を通して花が咲き、夏に収穫可能な四季成り性品種のイチゴである。夏季冷涼な地域が適地で、近畿での栽培はほぼ皆無といえる。そこで、標高が高く、夏季冷涼な天川村において、その産地育成に取り組んだ。



経緯

【H28年度】

・実需者から夏イチゴの栽培要望を受けた天川村が特産品開発と移住者の受け皿につながると判断。

【H29年度】

・標高850mの洞川地区において28㎡の仮設ハウスで予備試験を行い、7月～11月まで生産・販売可能と判断。

【H30年度】

・200㎡のハウスを建設し、面積を拡大して試験栽培を実施。

●関係機関との連携・分担体制

天川村(施設建設、販売先・担い手確保)

天川村農業委員会(栽培管理)

農業研究開発センター(情報提供)

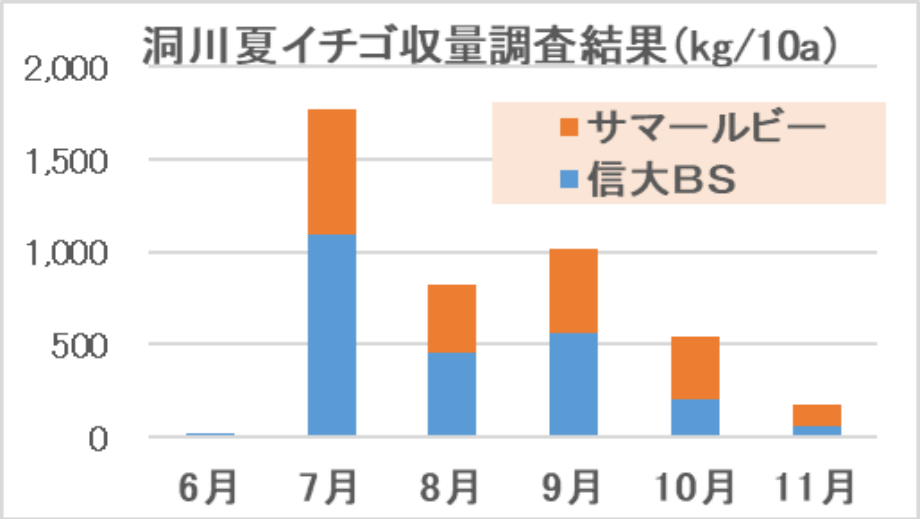
信州大学(品種に関する情報提供)

南部農林振興事務所(栽培指導、関係機関との全体調整)

夏どりイチゴの生産安定化

①品種選定

200㎡のハウスで6品種を栽培した結果、品質重視で信大BS、サマールビーに絞り込んだ。さらに、実需者とのマッチングを行ったところ、信大BSの評価が高かった。



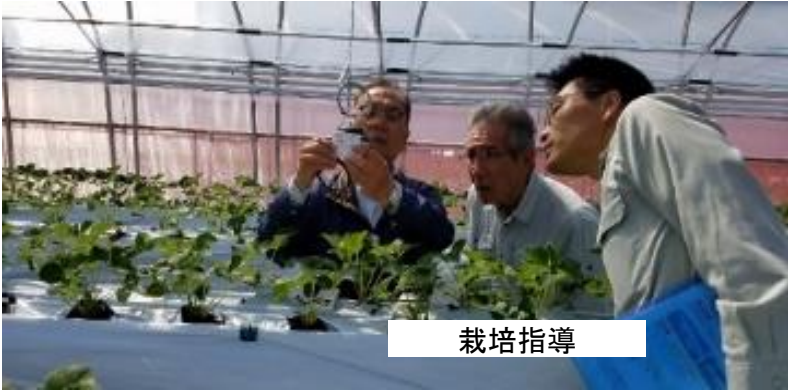
平成30年度品種試験結果概要 (収穫期間6/中～12/中)

	信大BS(8-9)	サマールビー	すずあかね	夏の輝	デコルージュ	ペチカ
収量(10a換算)	1.53t	3.1t	3.69t	1.76t	2.46t	－
評価コメント	収量が最も少ないが(改善の余地あり)、甘味が最も強くほどよい酸味もある	果皮少し柔らかく乱形果が多いが、甘味と酸味のバランスが良い	果皮硬く収量多く全国主流の品種だが酸味が強く食味評価は低い	甘味強い。果実が果梗から取れにくく作業性に難あり	どの時期に収穫しても水っぽい味	土壌伝染病害発生で6月に栽培中止
次年度(R1)向け品種選定結果	◎村外高級業務用向けとして作付け	○村内利用向けとして作付け	×	×	×	×

品質重視でR1年栽培向け2品種を選定

②生産の安定化

令和元年度に750㎡にハウス規模を拡大し、栽培を行った。定期的な巡回指導を実施。信大BSの収量は2.3t／10aで、糖度も10度以上で安定。



信大BS糖度の月別推移

測定日	6/26	7/19	8/27	9/17	10/29	11/19
糖度	10.3	10.9	12.7	13.0	13.2	13.1

③販売先と評価

村の直売所等3店舗と村外のケーキ店(4店舗)で好評。高級果実・加工品を扱う業者も関心を示した。また、奈良市にあるかき氷屋6店舗で、洞川「夏イチゴ」フェア(9／1～30)を開催

④経営試算

・売れ行き、評判ともに好調。夏場、青果1kgあたり3,500円で販売。ジャム等の加工用は1kg当たり村内1,200円、村外2,500円で販売。7/1～11/30の売上は295万円/750㎡。

粗収益 (千円)	経営費 (千円)					所得 (千円)	所得率(%)
		種苗費	出荷販売経費	減価償却費	その他		
5,700	3,218	821	584	1,440	372	2,482	43.5

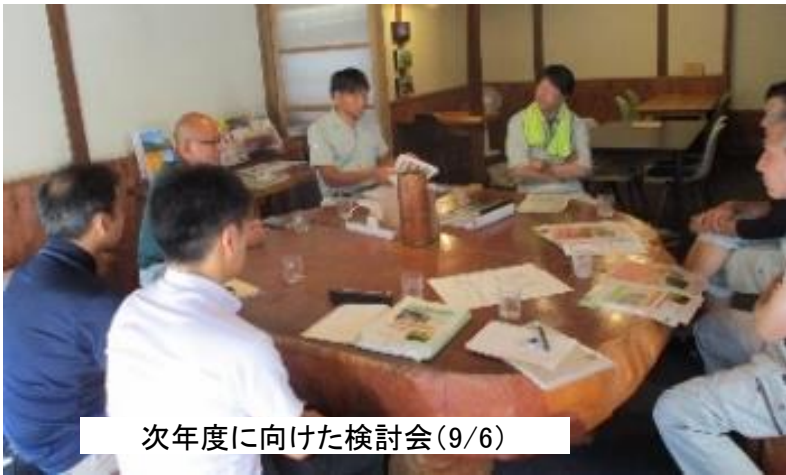
10a当たり粗収益
2,500円/kg(村外向け平均単価)×2.3t(R1年産ベース)で算出

⑤新たな担い手の確保

当初、栽培者である地域おこし協力隊のI氏が、村内カフェでイチゴの商品開発や販売に携わる予定となった。新たな担い手の発掘を行うため、移住希望者とのマッチングイベントやNAFIC等に情報提供を天川村とともに行った。その結果、新たな担い手を募集したところNAFIC卒業生1名(20代女性)が次年度より地域おこし協力隊として新たに村に採用され栽培管理することとなった。



現在主に栽培するI氏



次年度に向けた検討会(9/6)

今後の課題

- ・定植苗に2年生苗を活用するなど低コスト栽培の検証を行い、経費の縮減を図る必要がある。
- ・芽数や花数の管理を徹底するなど栽培技術の改善を続け、経営の安定化を目指す。

問い合わせ先

奈良県南部農林振興事務所農業普及課
〒637-0105 五條市西吉野町湯塩1345 TEL.0747-24-0131